令和７年度　外務大臣表彰（２）
受賞者の紹介

外務大臣表彰は、日本との友好親善関係の増進に特に顕著な功績のあった個人および団体について、その功績を称えるものです。令和７年度は、東京本部の推薦により平野久美子氏（ノンフィクション作家）が、台北事務所の推薦により林成蔚氏（元北海道大学公共政策大学院教授）が受賞されました。ご功績に対し、衷心より敬意と感謝を表します。今号では、台北事務所推薦の１名をご紹介いたします。

林成蔚　元北海道大学公共政策大学院教授

功績概要：日本と台湾との学術交流の促進

平成21年から約９年に亘り、北海道大学大学院、常葉大学の教授として教鞭を執り、日台関係、台湾内政等について大学内外で講義を実施され、これまでに累計1,000人以上の学生に教え、日台関係を担う人材を育成し、日台間の学術的交流や研究者間の交流にも積極的に貢献してきた。また同人は、台北駐日経済文化代表処代表特別補佐、台湾国家安全会議諮問委員、国防安全研究院執行長等の要職を歴任し、台湾内での対日政策等へのアドバイスを長年に亘り提供し、日台間の相互理解の促進と交流の深化に貢献している。

受賞のご挨拶

※こちらは2025年12月11日に台北市内で行われた、外務大臣表彰伝達式でのご挨拶です。

日本台湾交流協会の片山和之代表、優香里代表夫人、髙羽陽副代表、柿澤未知部長、交流協会の皆様、そしてご来賓の皆様、こんにちは。

まず、日本外務省にこの栄誉を授けていただいたことに心から感謝申し上げます。また、片山代表が本日、伝達式を特別に開催してくださったことに感謝いたします。私の人生で最も尊敬し、最も親しく、そして最も信頼できる仕事パートナーの皆様とともにこの栄誉を共有できることに、私は恐縮ながらも非常に幸せであると感じています。

この度の表彰連絡を受け取って以降、私はこれまで自分が何をしたのか、受賞に値するのかをずっと考え続けていました。なぜなら、15歳の時に台湾を離れ、日本に一人で向かった時のことを思い返すと、当時の私は「台日関係を促進する」という野心は全く持っていなかったからです。その後、米国で８年間過ごし、再び日本に留学して博士号を取得した後も、せいぜい自分はただの教師であり、これら二つの国のために何か人々に語られる価値のあることをする機会があるとは思っていませんでした。

むしろ、この40年間、私は「うつむいて登る登山者」だったように感じています。最初は「言語文化」の壁を登り、次に「学術研究」の山道を

登り、その後はさらに道を誤り、「国際政治」という険しい山に登り込みました。山頂がどこにあるのか考えず、この山がどれほど高いのか考える余裕もありませんでした。ただ足元の一歩一歩に集中し、石に直面すれば取り除く方法を考え、川に差し掛かれば橋を架けました。

心の中にはたった一つの単純な考えしかありませんでした。それは目の前の問題を解決し、一緒に働く仲間を孤立させず、更に重要なのは、両親や家族を失望させないことです。

もちろん、登山の過程で、多くの大切な人に出会いました。特に感謝したいのは、2004年当時の国家安全会議秘書長の邱義仁氏と、副秘書長の柯承亨氏で、私を日本から国家安全会議に呼び戻し、無理やり「険しい山道」である政治の道に引き込んでくれました。

さらに、蔡英文前総統に感謝します。当時、母親の健康上の理由で教職を辞めて台湾に戻ることを決めた際、総統はすぐに再び「険しい道」を開拓してくれ、私が登り続けることができるようにしてくれました。そして、一緒に働いた国安チームの仲間たち、道中で出会った日本の友人たちも、この道に欠かせない仲間です。私たちは一緒にたくさんの石を動かし、多くの橋を架けました。

この道を歩んできて、この外務大臣表彰という栄誉を得たことで、初めて顔を上げてみると、私はすでにかなり遠くまで来ていることに気づきました。目に映る景色は、45年前とは全く異なります。そのため、ただただ、感謝の言葉しかありません。本日この栄誉を得られたのは、私個人が何か小さな丘に登ったという意味ではなく、私はとても幸運で、道中に多くの貴重な家族や仲間がいたからです。

スピーチの最後に、私は過去の日本人の伝統を模倣し、人生の重要な瞬間に、俳句を詠んでその時の心境を記録したいと思います。

私の中国語は上手ではなく、日本語もまあまあなので、話すと皆様は笑うかもしれません。しかし、皆様を笑わせるためでも、私の少しの「わがまま」を許してもらうためでも、私は「日本の構造（つまり俳句の５-７-５、季語がないので川柳でしょう）」を使って、「中国語の心境」を埋め込んで、本日のまとめをしたいと思います。

この詩を台湾と日本に捧げるとともに、自分自身に対して台日間で自分の居場所を見つけたことを思い出させます。

若い頃故郷を離れ／白髪になっても心は島と島に繋がり／悟りを開いて異郷はないと気づく（少小離鄉去／白首心繫島與島／恍悟無異鄉）

ご在席の皆様、そして日本と台湾に感謝します、ありがとうございました。